

佳作

言葉をこえたやさしさ

神奈川県
横浜市立中川小学校 五年

劉 弘毅

「ほくの両親は、中国人だ。おじいちゃんも、おばあちゃんも、中国人だ。にもかかわらず、ほくは、中国語がうまく話せない。だから、月に何回か、おじいちゃんおばあちゃんと電話するときは、本当に苦労する。」

特に、母方のおばあちゃん、老老（ラオラオ）と話すときは、うまく話せない。しゃべっていることが少しも分らなくて、いやになってしまいうこともある。

けれど、ほくが、今、一番感謝の気持ちを、伝えたい人は、このおばあちゃんだ。

ほくは、なんでもすぐに人とくらべたがる。それで、自分の方が少しでも上手じゃないと落ちこむ。

その日は、いつもよりも、ひどく落ちこんでいた。習い事のえんげきで、相手役だった子は、台本をかんべきに覚えていた。なのに、ほくは、何回も言葉につまった。それで、落ちこんでいたのだ。

その日、ちようど、おばあちゃんと電話をした。ゆううつで、そんな気分じゃなかったけれど、お母さんに呼ばれて、しぶしぶ受話器をとった。

おばあちゃんは、いつでも元気だ。

「もしもしっあつ、弘毅！」

この日も、おばあちゃんの元気な声が、受話器の向こうからひびいてきた。なんだか、なやんでいることを、忘れてしまいそう

な声だった。

その後、少し話をしてから、おばあちゃんは、こう言ってくれた。

「弘毅のことが大好きだよ。弘毅は、そのままで十分だよ。」

落ちこんでいたほくには、すこくはげみになる言葉だった。

もちろん、中国語だ。そんなによく分かるわけじゃない。おばあちゃんの顔も見えない。ほくが落ちこんでいるのを知って、気づかってくれたわけでもない。

でも、一つだけ、ほくに伝わってきたことがある。それは、おばあちゃんの、言葉をこえたやさしさだ。

言葉は通じないけれど、おばあちゃんの声を聞くだけで、なんだか心が軽くなっていく。すこく不思議だった。だけど、すこくうれしかった。

今でも、おばあちゃんはほくに元気をくれる。だから、早く中国語を覚えたい。早く、おばあちゃんと話せるようになって、おばあちゃんのことをもっと分かりたい。

だから、いつまでも、元気でやさしいおばあちゃんのままいてほしい。ほくは、いつまでも、おばあちゃんのことを、大好きだから。